

# 崩れる「国家の自然観」 ウイルスも川も私たちは制御できない

評 西村祐人（株）デザイン・フォー・ヘリテージ代表取締役

ウイルスとの「闘い」という言葉が世の中を飛び交い、人類が危機を共有するようになり数カ月が経とうとしている現在、近代的な何かが明らかに崩れ始めたことを肌で感じる。「闘い」や「克服」という人間本位の言葉が無力化されるほどに、人知を超えた自然の本質がむき出しになっている。

自然には、「害」と「恵」の両面があることを熟知していた私たちの先祖は、「山川草木悉有仏性」の思想の中で、人間の利己性に対するある種の「うしろめたさ」をかかえながら、独自の価値観、すなわち「民衆の自然観」を育んできたと著者はいう。

対して、明治以降の近代科学技術を核とする「国家の自然観」は、自然を制御することで、人間社会に平等性をもたらそうとする発想

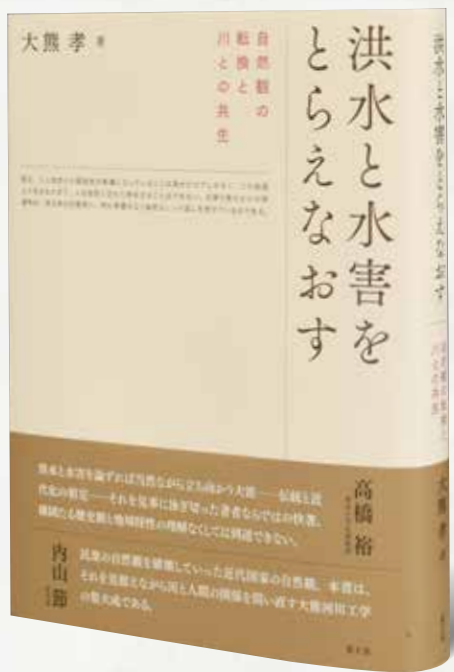
である。しかし、ダムがやがて土砂で満杯になる日を迎えるように時間を空間で埋め合わせようとするこの限界、あるいは、満水となったダムが「緊急放流」すること、あらたな水害を誘発する可能性や、ゲート操作に従事する特定の人間にその重責が押し付けられるという構造が、表向きの平等性の裏側に隠れていることを指摘する。この「国家の自然観」が有する非対称性に真っ向から向き合うことが、前著『技術にも自治がある』から一貫する著者の姿勢だ。

縄文人のように暮らし、自然への感性を育んだ幼少期から、近代的科学技術への懐疑の芽生え、脱ダムの立場をとるようになる経緯、そして、30年以上にわたる新潟の水辺での活動が、著者自身の思想の形成過程にどのような影響を与

えたのかをなぞることができ

る。本書の話題は、著者の専門である川や水辺ではあるが、そこで提起されることはあらゆる分野に通ずる。さまざまな場所で「近代」のほころびが生じている今、「国家の自然観」によって剥ぎ取られた「生の実感」が、再び民衆の手に還される日はそう遠くなさそう

だ。本書は、「民衆」と「国家」のせめぎ合いの中で、新たな自然観を模索する次代の担い手へ受け渡されたバトンだといえる。



## 『洪水と水害をとらえなおす ——自然観の転換と川との共生』

大熊 孝 著

農文協 2700 円 + 税